

あまねく

amaneku

2026 vol.16



同志社大学 スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援センター

「あまねく」第16号発刊によせて

スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援センター長
竹田 正樹

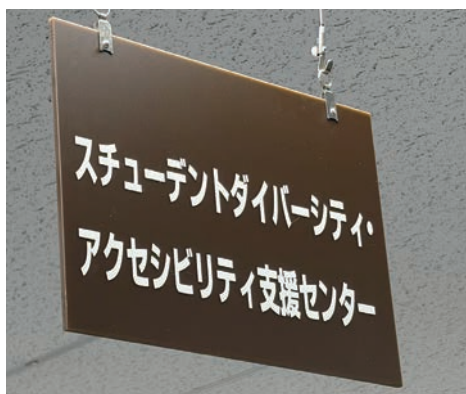


同志社大学では、1949年に日本で初めて点字による大学入試を実施して以来、障がいのある学生の学ぶ権利を保障するため、時代に応じた支援を積み重ねてまいりました。身体障がい学生への支援から始まった取り組みは、現在では精神・発達障がいを含む多様な学生を対象とした、全学的な支援体制へと広がっています。

近年、合理的配慮に対する社会的理解は大きく進み、大学には一人ひとりの学生の特性や学修環境に応じた柔軟な対応が求められています。本学では2026年度より、スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ（SDA）支援室をSDAセンターへと改組し、全学的な支援体制のさらなる強化を図りました。学生・教職員との対話を重ねながら、誰もが安心して学びに向き合える環境づくりに取り組んでいます。

また、オンラインと対面を組み合わせた学修支援も定着しつつあり、支援のあり方はさらに多様化しています。学びの形が変化する中で、SDAセンターは学生一人ひとりの声に耳を傾けながら、よりよい支援の在り方を模索し続けています。

今日、大学には「多様性を尊重する」だけでなく、多様な背景や特性を持つ人々が互いを理解し、それぞれの力を発揮できる環境を実現することが求められています。同志社大学が、すべての学生にとって開かれた学びの場であり続けるために、本誌「あまねく」が、その理念と取り組みを共有し、共生社会の実現について考える契機となれば幸いです。



目 次

はじめに「あまねく」第16号発刊によせて	01
<大学内行事開催状況>	03
03 2025年度 入学式 手話通訳 / 2025年度 入学式 パソコン(PC)通訳 / オリエンテーション活動 2025年度「クラブ・サークル勧誘活動」	
04 2025年度「サポートスタッフ募集説明会」 / 2025年春学期「サポートスキル勉強会」 / 2025年春学期「ランチタイム手話」	
05 「階段誘導キャンペーン」第2弾 / ワイワイ水曜カフェ / 春学期末全体懇談会	
06 利用学生、サポートスタッフによる「ノートテイク勉強会」 / きくことに困り感のある学生への補聴援助システムと音声認識ツールの活用方法に関する勉強会	
07 同志社大学×立教大学つながる！学生交流サマーキャンプ / ガイドヘルプおよび車いす介助の講習会	
08 第21回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム	
09 身体障がい体験講習会・発達障がいパネル展	
10 同志社創立150周年記念式	
11 2025年度秋学期末全体懇談会	
12 コンソーシアム事業シンポジウム『高等教育における障がい学生支援の包括的実態調査と 「学びのユニバーサルデザイン」構築に向けたコンソーシアム型支援モデルの提案』	
<社会貢献事業>	13
13 関西万博2025/ 第33回パラアーティスティックスイミングフェスティバル	
<SOGIに関する取り組みについて>	14
14 同志社レインボー映画祭 / 教職員対象 LGBTQ+の学生への配慮・対応に関する研修会 / 性の多様性に関する調査	
15 LGBTQ+ パネル展	
<スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援センターについて>	16
<同志社大学における障がい学生支援の沿革>	17

大学内行事開催状況

●2025年度 入学式 手話通訳

開催日・場所：4月1日（火）京田辺校地 デイヴィス記念館

協力スタッフ：3名

同志社大学では、多くの学生が障がいのある学生を支えるサポートスタッフとして活動しています。2025年度入学式において、SDA室のサポートスタッフがパソコン通訳と手話通訳の活動をしました。

今回、活動協力してくれたサポートスタッフの声を紹介します。



【手話通訳スタッフの声】

柏木 裕美子（文化情報学部文化情報学科 3年次生）

2025年度春学期入学式で手話通訳を担当しました。入学式は人生の晴れ舞台であり私自身強く記憶に残っているイベントだったので、関わらせていただけることがうれしかったです。準備をする中で、どのようにすれば自然で分かり易い通訳になるだろうと工夫を繰り返し、自分自身も成長できたと感じています。誰かの言葉を通訳するということは責任があることでとても緊張しましたが、壇上で晴れやかな新入生の皆さんを見てからは、皆さんの学生生活を応援する気持ちで挑むことができました。

手話通訳のみならず様々なサポートにおいて、学生スタッフの活動する姿は他の学生にも良い刺激になると思います。大学の手話サークル内でも入学式で先輩の手話通訳を見て手話に興味を持ったという声も多いです。SDA室のサポート活動を拡充するためにもこれからも活動を続けたいと思いました。またそのためにも知識を身に付け技術を高められるように精進を重ねていきたいです。

●2025年度 入学式 パソコン（PC）通訳

開催日・場所：4月1日（火）京田辺校地 デイヴィス記念館

協力スタッフ：4名

【PC通訳スタッフの声】

橋本 まあや（スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科 2年次生）

私が、PC通訳に参加したきっかけは、自身の入学式で、実際に通訳されている姿をみて、強い感動と憧れを抱いたからです。

私は、車いすユーザーの障がい学生ですが、自分に関わるサポート以外（車いす介助や代筆等）は、あまり知りませんでした。また、恥ずかしながらPC通訳というサポートがあること、入学式で実際に行われていることをそこで初めて知りました。この時、今まで助けてくれている人に恩返しがしたいと思っていたので、来年は必ず支える側に回ろうと決意しました。

実際通訳をしていたときは、はじめての経験に必死で、「本当に人の役に立っているのか」などと考える時間もありませんでした。入学式が全て終わった後、無事に終わった安心感と、困っている人の役に立てたかもしれないという達成感がいっぱいになりました。

これからも支えてくださっている人に少しでも恩返しできるよう自分にできることで誰かのためにサポートができれば嬉しいです。



●オリエンテーション活動 2025年度「クラブ・サークル勧誘活動」

開催期間・場所：4月2日（水）～4月4日（金） 両校地

協力スタッフ：12名

2025年4月2日～4月4日今出川・京田辺両校地で実施された「クラブ・サークル勧誘活動」にSDA室も参加しました。キャンパス内にブースを設置し、新入生や在生学生に向けて、SDA室のサポート活動についての説明や、ビラ配りを行いました。今回は勧誘活動に参加してくれたサポートスタッフの声を紹介します。



【サポートスタッフの声】

三宅 香杜果（文学部美学芸術学科 4年次生）

私がクラブ・サークル勧誘活動に参加したのは、開講期間中に十分に活動できなかった分、スタッフとして成長する機会にしたいと考えたからです。また、SDA室の存在を多くの人に知ってもらいたいという思いもありました。2024年度秋学期から臨時スタッフとして活動を始めた私は、この度の勧誘活動にあたって、経験が浅く不安もありました。しかし、職員の方やサポートスタッフ、利用学生と勧誘方法やブースのレイアウトについて相談を重ねる中で、自分もSDA室の一員であることを実感できましたし、障がいの有無にかかわらず、さまざまな立場の人が互いに支え合うSDA室の魅力を改めて感じました。

当日は「SDA室って知っていますか？」という質問から会話を始めました。入学当初の自分がSDA室を知らなかったことが理由です。勧誘が目的ではありませんが、まずは存在を知ってもらえたらという気持ちで話していました。SDA室は、いろいろな形で人と触れ合い、関わるができる場所だと私は考えています。その魅力が少しでも伝わっていれば幸いです。

●2025年度「サポートスタッフ募集説明会」

開催日・場所：4月16日（水） 両校地オンライン開催

4月22日（火）・5月15日（木） 今出川校地 明德館地下1階ラウンジ

4月24日（木）・5月16日（金） 京田辺校地 多目的ホール西側ラウンジ

協力スタッフ：9名



●2025年春学期「サポートスキル勉強会」

【春学期】開催期間・場所：4月～7月（番外編含む）両校地オンライン開催・一部対面開催

参加者数：延べ69名

講師協力：3名（利用学生・学生スタッフ）

【秋学期】開催期間・場所：9月～1月（番外編含む）両校地オンライン開催・一部対面開催

講師協力：延べ7名（利用学生・学生スタッフ）

SDA室では、障がい学生支援に関する様々なサポートについてスタッフのスキルアップを図るため、毎年春・秋にサポートスキル勉強会を開催しています。



【参加学生の声】

穴澤 一葉（文学部美学芸術学科 1年次生）

今回、私は「ガイドヘルプ講座」と「車いす介助講座」に参加しました。この2つの講座に参加した理由は、初めてサポートスタッフとして登録したので「ガイドヘルプ」という名前だけではどのようなサポートが想像しにくかったことと、車いすの方を介助した経験が無かったからです。どちらもあまり具体的にイメージできないまま参加し、とても不安だったのですが、SDA室のコーディネーターの方が基礎から丁寧に教えてくださったので初心者でも分かりやすい講座でした。

ガイドヘルプ講座では、実際に目を閉じ、利用学生と同じ状況で他の参加者のサポートを受けたことが印象的でした。隣で腕を組み支えてくれる人がいたとはいえ、目を閉じて歩いたり階段を上ったりすることは想像以上に怖いものでした。しかし、この経験が利用学生の気持ちを想像するというサポートスタッフとして不可欠な視点を学ぶことに繋がったと思います。車いす介助講座も、実際に利用学生の視点に立つ講座で、これからのサポートに活かしていこうと思いました。

柿崎 美由紀（心理学部心理学科 1年次生）

私がPC通訳勉強会に参加した理由は、PC通訳ができるようになれば、サポートスタッフとして活動できる機会が増えると思ったからです。聴覚障がいのある利用学生のサポートで、PC通訳の募集が多い中、自分に技術がないことが悔しかったので、意気込んで参加しました。実際に勉強会でPC通訳をしてみると、その難しさに驚きました。最初はあまり上手く連係入力ができず、心が折れそうになりましたが、いろいろなアドバイスをもらってどんどん文字が打てるようになっていきました。自分の成長が感じられてとてもうれしかったです。難しいですが、その分、やりがいもある活動だと感じました。

その後、実際の授業で活動したときはとても緊張しました。本当に自分ができるのか心配でしたが、勉強会で学んだことをもとに、どうにかやりきることができました。先輩のスタッフの方と一緒にだったので、とても心強かったです。大変でしたが、それ以上に利用学生の情報保障に役に立っているということがとてもうれしかったです。これからも入力練習をし、もっと多くの情報を打ち出せるように頑張りたいです。

●2025年春学期「ランチタイム手話」

【春学期】開催期間・場所：4月～7月 第2・第4水曜日 初回のみオンライン開催

今出川校地 良心館サンクンモール横地下ラウンジ

京田辺校地 多目的ホール西側ラウンジ

参加者数：約16名/回

講師協力：7名（利用学生・学生スタッフ）

【秋学期】開催期間・場所：9月～1月 第2・第4水曜日 初回のみオンライン開催

今出川校地 良心館サンクンモール横地下ラウンジ

京田辺校地 日糧館2階ラウンジ

参加者数：約13名/回

講師協力：9名（利用学生・学生スタッフ）



2025年も毎月第2・第4水曜日に、講師スタッフによるランチタイム手話を開催しました。ランチタイム手話は、挨拶や自己紹介・季節などのテーマにそった簡単な会話を通して、手話でコミュニケーションをとることを楽しんでもらう目的で行っています。

今回は、2024年秋学期開催時の講師スタッフの声を紹介します。

【講師スタッフの声】

燕木 杏優（文化情報学部文化情報学科 3年次生）

私は以前から手話に興味があり、一年前から本格的に学び始めました。ランチタイム手話にも何度か参加しており、秋学期にSDA室から手話講師の依頼をいただきました。「指文字もまだ完全に覚えていない私に務まるのだろうか」と不安でしたが、せっかくの機会を活かしたいと思い、挑戦することになりました。

実際に講師をしてみて、自分自身の方が学ぶことが多いと感じました。わからない手話表現があれば参加者の方に教わることもあり、新しい発見が毎回ありました。また、ランチタイム手話はその季節や行事に沿った内容に変わるため、その時々で新しい手話表現を学べるのも魅力の一つだと思います。

何より、ランチタイム手話は普段関わることでできない人たちと関わる機会となって、自分の視野がより広がりました。お昼の30分という短い時間ではありましたが、学びだけでなく、人とのつながりを感じる大切な時間になりました！

●「階段誘導キャンペーン」第2弾

開催日・場所：4月22日（火）・4月25日（水） 今出川校地 良心館
4月21日（月） 京田辺校地 大学正門付近
協力スタッフ：延べ4名（利用学生・学生スタッフ）

2025年4月21日に京田辺校地、22日・25日に今出川校地で車いす利用者や移動に困難さがある方々のエレベーター利用優先を目的とした啓発キャンペーン第2弾を実施しました。この取り組みは下肢や内部障がいのある学生から「混雑時にエレベーターを優先的に利用できないことがある」という声を受けたことがきっかけとなり、始まりました。サポートスタッフや利用学生とともに啓発チラシを配布することで、エレベーター混雑の緩和と利用環境の改善を目指しています。

一緒に啓発チラシ配布の協力をしてくれた利用学生の声を紹介します。



【利用学生の声】

金澤 功貴（総合政策科学研究科 2年次生）

自分自身が車いすユーザーであり、エレベーターを使う機会も多いことから、今回の活動に参加させていただきました。授業前後の時間帯は、やはりエレベーターを利用する学生も多く、この状況で車いすユーザーがエレベーターを利用するのは、かなり時間がかかりそうな印象を受けました。

見知らずの学生に声をかけるのは、最初はとても勇気のいることでしたが、実際に声をかけてみると、受け取ってくれたり、足を止めて話を聞いてくれる方も多く、声を上げることで伝わり、つながることが多くあるのだと改めて実感しました。また、何度も声をかけているうちに、どのように声をかけたら足を止めてくれるのか、どのようにしたらより伝わりやすいのか考えるようになり、声のかけ方や伝え方を工夫することも相互理解に近づく一歩なのだと感じました。

実際に当事者（車いすユーザー等）が活動に参加することで、より多くの方に伝わるきっかけになるとと思いますし、自分自身も感じる事が多くあったため、今回活動に参加してみてよかったです。次回以降も、ぜひ参加したいと思いました。

●ワイワイ水曜カフェ

開催期間・場所：5月21日～7月16日 第1・第3水曜日
今出川校地 良心館サンクンモール横地下ラウンジ
京田辺校地 多目的ホール西側ラウンジ

参加者数：延べ29名（学生スタッフ18名、職員11名）

普段支援活動を行うなかで、「こんなとき、どうすればいい?」といった疑問や、「よりよいサポート方法について確認したい!」ことをリラックスした雰囲気です話カフェを開きました。



●春学期末全体懇談会

開催日・場所：7月28日（月） 今出川校地 至誠館 S32 教室
オンラインとのハイブリッド開催

参加者数：48名（利用学生10名、学生スタッフ20名、教職員18名）

2025年7月28日今出川校地対面で開催しました。今回の懇談会では、まずアイスブレイクを行い、グループのメンバーで交流した後、サポートに関する〇×クイズを出題しました。「こういう場面ではSDA室のサポートスタッフとしてどのような行動を取ればよいか」、「利用学生はサポートスタッフに対してどこまでサポートをお願いできるか」等、『合理的配慮』をキーワードに、配慮を必要とする利用学生、サポート活動を行うスタッフ、それぞれの立場から活発な意見交換が行われました。

その他、お茶・お菓子を食べながら、現在SDA室が発行しているバリアフリーマップの新しい名称を考える時間を設けました。

普段接することの少ない他校地や学年の違う利用学生、サポートスタッフが交流できる機会となり、有意義な懇談会となりました。



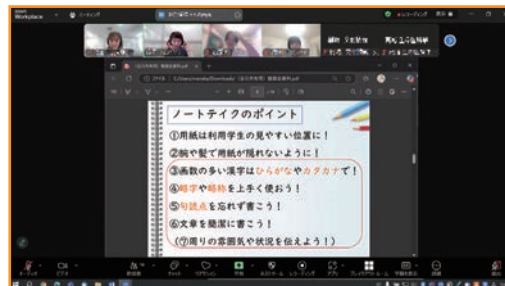
【参加後のアンケートの一部をご紹介します】

- ・他のサポートスタッフの方や自分が担当していない利用学生の方と校舎関係なく交流できる貴重な機会を用意して下さりありがとうございました。とても楽しい時間でした。
- ・この活動を通して、障がいへの理解や合理的配慮の必要性について深く考えることができました。
- ・色んな困難を抱えている学生がいることや、サポート側がどのように関わるのが適切か細かいところも理解できいい機会になりました。

●利用学生、サポートスタッフによる「ノートテイク勉強会」

開催日・場所：7月10日（木） オンライン開催
 参加者数：11名（学生スタッフ4名、職員7名）
 講師協力：2名（学生スタッフ）

2025年7月10日に「読みやすいノートの書き方を知ろう！」というテーマで、オンラインでノートテイク勉強会を開催しました。普段ノートテイクサポートを利用している利用学生、ノートテイクサポート経験のあるサポートスタッフが講師となり、聴覚障がいについて、読みやすいノートの書き方についてスライドを表示しながら、実際に音源を流してノートテイク体験をしました。今回、講師を担当してくれた学生の声を紹介します。



【スタッフの声】

越智 愛佳（文学部英文学科 4年次生）

今回、ノートテイク勉強会に講師として参加させていただきました。

準備にあたり、ノートテイク例を作成するため、模擬授業動画を視聴しながら実際にノートテイクを行いました。その際、話し手のスピードだけでなく、スクリーン上の情報量や講義の専門性によってノートの取り方を変える必要があることに気づきました。また、ノートに関して利用学生の視点から必要に応じて単語を省略する等のアドバイスをいただき、速く正確に多くの情報を伝える手がかりが見つかりました。初心に返ったことで新たな気づきを得ることができ、大変勉強になりました。

何より大切なのは、利用学生が必要としている講義情報を最大限保障することだと考えています。コミュニケーションを通してニーズを把握し、自己満足にならぬよう合理的なサポートを努める必要があると思いました。

勉強会終了後、SDA室の職員の方を通じて参加者の感想を伺い、改めてこの勉強会に携わることができて嬉しく感じました。今年度で卒業しますが、残りの時間でSDA室の活動に興味をもってくれる人を増やすことをささやかな目標に活動を続けたいです。

【利用学生の声】

近藤 成（文学部国文学科 4年次生）

聴覚障がいのある利用学生の立場としては、まずノートテイクという支援に携わってくれる方がいるということ自体、とても有難いことだと思っています。その上で、こうして勉強会に参加して下さることが本当に嬉しかったです。また、私自身、自分の困り感がどのようなもので、どのような配慮が欲しいのか、どんなノートを書いてほしいのか、ということと言語化し内省するよい機会をいただけたなと思っています。今回はあくまで「私が」見やすいノートについてお話しましたが、実際には言葉の省略の範囲や字の大きさなどについては、個人の好みやニーズによって違うので、これをきっかけに、ご自身がサポートを担当されている利用学生とも話し合っていいただければ幸いです。

「ノートテイク支援」と聞くと難しそうに聞こえますし、身構えてしまうところもあるかとは思いますが、こういった勉強会を気軽に見るだけでもよいですし、少しでも身近なものに感じてもらえたらいいなと思います。

●きくことに困り感のある学生への補聴援助システムと音声認識ツールの活用方法に関する勉強会

開催日・場所：8月19日（火）13:00～15:30 今出川校地明徳館 SDA 地下ラウンジ
 参加者数：8名（学生1名、職員7名）
 講師：京都大学 学生総合支援機構 障害学生支援部門
 高等教育アクセシビリティプラットフォーム（HEAP）事務局 大前氏

現在、同志社大学には補聴援助システムを必要とする、きくことに困り感のある学生が複数名います。補聴器や関連機器の開発が進む中、補聴援助システムと音声認識ツールを活用した支援の習得と対応の向上を図ることを目的とした勉強会を開催しました。



【参加者の声】

榎本 裕介（生命医科学部医工学科 1年次生）

私は生まれつき重度難聴を抱えており、両耳の聴力は100dB以上です。病院で両耳重度感音性難聴と診断されてからは補聴器を装着して生活してきましたが、小学6年生の時に「聞こえるようになりたい」という気持ちが強くなり、意を決して人工内耳の埋込手術をしました。現在、人工内耳を装着した時の聴力はおよそ30dBと小さい音も聞こえるようになりましたが、健聴者と同じように「言葉」をはっきり聞き取ることは難しいです。今回、器械勉強会に参加させていただき、聞こえを補うためのロジャーの使い方や、今までの人工内耳手術をした学生さんの体験談などを教えてくださいました。最も印象に残った機器は、ロジャーパスアラウンドマイクです。話者が複数人いたとしてもロジャーパスアラウンドマイクを使うことで、すぐ近くで聞くのと同じくらい大きく聞こえる点に魅力を感じました。来ていただいた講師の方はとても親身に教えてくださいまして感謝しています。貴重なお話ありがとうございました。



●同志社大学×立教大学 つながる！学生交流サマーキャンプ

開催期間・場所：2025年9月2日（火）～9月4日（木） 2泊3日

同志社びわこリトリートセンター

参加者数：同志社大学学生と立教大学学生 32名

同志社創立150周年を記念し、また同志社大学と立教大学の連携事業の一つとして、9月2日から4日にかけて「同志社大学×立教大学 つながる！学生サマーキャンプ」が開催されました。3日間、様々なプログラムが用意される中、SDA室は9月3日に視覚障がい体験プログラムを担当し、アイマスクを装着した「ブラインドスクエア」と「ガイドヘルプ」、そして「食事体験」をしました。

参加者からは、「アイマスクをして何も見えない状態だったけれど、リーダーシップをとって指示をしてくれる人がいたので、縄の振動を感じながら正確な形を作ることができた」「どこを歩いているかわからなかったけれど、ガイドヘルプをしてくれる人がいたおかげで目的地まで行くことができた」という声や、「何を食べてるかわからない（汗）」「ごはんってこんなに甘かったんだ」という感想がありました。



●ガイドヘルプおよび車いす介助の講習会

開催日・場所：9月25日（木）今出川校地寒梅館ハーディーホール

参加者数：27名

2025年9月25日に今出川校地寒梅館で「ガイドヘルプおよび車いす介助の講習会」を実施しました。寒梅館地下にあるハーディーホールやクローバーホールでは、学生支援センターはじめ学生団体がさまざまな催しをしています。車いすユーザーや視覚に障がいのある来場者に、気持ちよく楽しんでいただけるよう、ホールの運営補助をする学生アルバイトやホールを利用する学生団体対象に、講習会を行いました。

参加した学生の声を紹介します。



【参加者の声】

- ・障がいのある方がホールにいらっしゃった場合の対応について、実践しながら学ぶことができた点が勉強になりました。アイマスク体験や車いす体験を通して障がいのある方がどのような困りごとを抱えているか、どんなサポートや声掛けがあるとより安心できるのかを、相手の立場に立って考えることのできる機会になったと感じます。私たちにとって寒梅館はホールの位置関係や階段の構造などよく把握できている場所であるためにスムーズに進んだところもあり、寒梅館に初めて来られる方であればさらに丁寧なサポートが必要だと思いました。
- ・実際にアイマスクをして館内を周ることで、普段は気づかない危険な場所に気づくことができました。特に、急な階段よりもホール内の傾斜の少ない広めの階段の方が怖く感じる点が意外でした。介助する側にもされる側にも立つことで、より具体的にどのような対応を取るべきか学ぶことができました。また、車いす介助の体験ではドアを通る時に足がぶつかるのではないかと感じる場面が多々あり、これから補助する際には出来る範囲でドアを広く開けるべきだと考えました。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。
- ・ガイドヘルプおよび車いす介助の講習会に参加して、実際に体験することで視覚や移動の制限がもたらす困難を身をもって感じました。アイマスクによる視覚障がい者の体験では、視覚を失うことで平衡感覚も揺らぎ、階段の上り下りさえも分からず、とても恐怖を感じるようになりました。また、車いすでの体験では目線の位置が低くなることで受け取れる情報が減り、自分の意思で簡単に動けないことの大変さも実感しました。今回の体験を活かし、誰もが安心して楽しく劇場を利用できる環境づくりに役立てていきたいと強く感じました。

●第21回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム

開催日・場所：9月27日（土） 国立オリンピック記念青少年総合センター
協力スタッフ：10名（利用学生・学生スタッフ8名、職員2名）

9月27日に国立オリンピック記念青少年総合センターで日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）主催「第21回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム」が開催され、SDA室のサポートスタッフ・利用学生・職員が参加しました。

「聴覚障害学生支援に関する実践共有セッション」では、学生が主体となり同志社150周年記念式典での日本語・英語同時パソコン通訳（情報保障）の取り組みや、サポート活動における事例をポスター形式で発表しました。

発表にあたっては、事前練習の成果を活かし、来場者の方に手話や音声で丁寧に、一生懸命伝える姿が印象的でした。他大学の取り組みや、大学を越えた学生同士の交流の機会もあり、参加学生にとって実り多き時間となりました。

また、セミナー「ネットワークで支え合う支援—地域のつながりを力に」では、当室コーディネーターが話題提供者として登壇し、障がい学生支援に携わる「実務者目線」を基本理念とした「関西障がい学生支援担当者懇談会（KSSK）」の立ち上げの経緯や取り組みについて講演しました。

ここでは、今回シンポジウムに参加したサポートスタッフ・利用学生の声を紹介します。



【利用学生の声】

橋本 まあや（スポーツ健康科学部スポーツ健康科学科 2年次生）

今回は、今までに無い経験を沢山させていただきました。参加が決まった時は正直こんなに準備が大変とは思っておらず、毎回苦戦しましたが、ミーティングを重ね自分でも調べて、最終的に素敵なポスターとチラシができたように思います。

今回感じたことは、人は十人十色でその中には障がいのある人ない人、障がいがある人の中でも様々で、みんなにそれぞれ生きる上での役割が与えられていることに気づきました。私のように車いすに乗っていても誰かの相談に乗ることはできるし、口話は苦手でも手話を教えることは出来るなど、深い話ですが全員には生きる意味があるのだと気づくことが出来ました。

【サポートスタッフの声】

沖 祐里（理工学部数理システム学科 2年次生）

学生交流会で聴覚に障がいのある方がこれまで感じてこられた「孤独」を体験し、私自身、日常生活における情報保障が想像以上に不十分である現状を痛感しました。その交流会では音による情報がなく、場合によっては手話のみで情報が伝えられる場面もありました。手話がわからない私にとっては、ほとんど情報が得られない状態でした。参加するまでは、「最終的に必要な情報が伝われば十分」と考え、筆談などでゆくり情報を共有できればいいと思っていました。しかし実際に体験してみると、情報が遅れて伝わるだけでも強い不安を感じ、会話についていけない孤独を味わいました。その経験から、聴者が得る情報とほぼ同じタイミング・スピードで保障されてこそ、本当の意味での「情報保障」と言えるのではないかと考えが変わりました。このようなことは、聴覚障がいのある方に限らず、さまざまな場面にも当てはまると思います。支援する側が「十分に配慮している」と思っている、実際にはまだ足りていなかったり、「申し訳なさ」から声を上げづらい人が多くいたりするかもしれません。そうした困りごとを私たち SDA 室が汲み取り、共に解決へ向けて行動していきたいと強く感じました。



写真提供：PEPNet-Japan 事務局

●身体障がい体験講習会・発達障がいパネル展

【身体障がい体験講習会】

開催日・場所：10月23日（木） 今出川校地 良心館サンクンモール横地下ラウンジ
10月28日（火） 京田辺校地 ローム記念館劇場空間・グランドフロア
参加者数：延べ53名

【発達障がいパネル展・個別説明会】

開催期間・場所：10月27日（月）～10月31日（金）
今出川校地 ラーニングコモンズ（10/31 個別説明会）
京田辺校地 ローム記念館劇場空間・グランドフロア（10/30 個別説明会）

教職員・学生を対象に、障がい学生支援に関する理解促進を目的として、2025年10月23日に今出川校地、10月28日に京田辺校地で身体障がい体験講習会、10月27日～31日に両校地で発達障がいパネル展を開催しました。

「身体障がい体験」では、点字体験・アイマスクをしながらパンを食べるといった体験を通じて、全盲体験をしていただきました。見えないことによる難しさや怖さ、移動介助の難しさ等、体験を通して様々な社会的障壁に気づく時間となりました。

また、関連企画として、全盲、羞明、視野狭窄など、視覚障がいのある方の見え方や困り感について紹介したポスターを掲示しました。

「発達障がいパネル展」では、自由に見ていただけるパネル展示、コーディネーターによる個別説明会を通じて、発達障がいに関する理解を深めることができました。



【参加者の声】

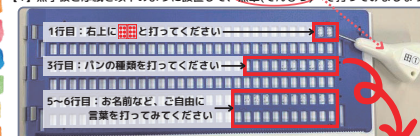
- ・視覚障がいの方をサポートする時に、ついつい「あれ、それ」とか見えている人の視点から言ってしまうことが多くて、説明（次になにがあるよ）がとても難しいなと思いました。見えない側に立って考えられるようにしたいです。
- ・視界が暗くなるだけで目の前のことが何も分からなくなる怖さや不安感を体験できました。指で点字を読み取るのはとても難しかったですが、目が見えない方のなかなか共有できないような不自由さを身を持って理解できて良かったです。面白い企画、ご丁寧なご指導、おいしいパンとお茶をどうもありがとうございました。
- ・思っていたよりも歩くのに怖さがあった。味も合っているか分からないと思ったほどであった。貴重な体験でした。
- ・昨年も参加させていただいたので、2度目の挑戦でしたが、今回ガイド側として参加するのは初めてでした。椅子から立ってもらったり、座ってもらったり、椅子をひいてもらうのが、特に難しかったです。また、ぜひチャレンジしたいです。ありがとうございました。
- ・とても満足できました。友人にもぜひやってもらいたいと思いました。実際に体験してからじゃないと得られないことがあり、とても良い経験になりました。普段から手助けをしている方だと思いますが、これからもっと寄り添って助けて手伝ってあげられると思いました。大学生全員に体験して理解を深めてほしいと思いました。

点字の打ち(書き)方

【点字のルール】

- ①打つ(書く)時は、必ず右から左へ打ちます。
- ②全てカタカナ表記となります。
- ③読む面(凸面)は左から右へ読みます。

【1】点字板と厚紙を以下のように設置して、点字(てんじつ)で打ってみましょう。



【2】点字板から厚紙を外して凸面を表にしたら、点字を読むことができます！



●同志社創立150周年記念式

開催日・場所：11月29日（土） 国立京都国際会館
協力スタッフ：10名

2025年11月29日に開催された同志社創立150周年記念式において、SDA室のサポートスタッフが情報保障として、手話通訳および日本語・英語の同時PC通訳を担当しました。約2000人の来場者とYouTubeでのライブ配信もあり、「緊張する」といった声もありましたが、式典が始まるとそれぞれの練習の成果を発揮し堂々と通訳する姿がとても素晴らしかったです。日本語・英語の同時PC通訳においては、日本語を翻訳しながら英語に表出する通常のPC通訳より高度な対応もありましたが、今までの経験を活かし落ち着いて対応してくださった姿が印象的でした。

SDA室の脈々と受け継がれてきた支援技術を、記念式という大舞台で遺憾なく発揮することができたのは、手話通訳メンバー・PC通訳メンバーそれぞれの豊富な経験と、チームとしての高い連携力の賜物だと感じています。

今回、活動の協力をしてくれたサポートスタッフの声を紹介します。



【手話通訳スタッフの声】

清水 萌翔（社会学部教育文化学科 4年次生）

私は、これまでSDA室のランチタイム手話で講師をしていました。その関係もあり、今回150周年記念式典での手話通訳を務めさせていただくことになりました。初めての通訳だったので大変なこともたくさんありますが、このような記念すべき日に通訳させていただき感謝しています。

今回の活動を通じて、あらためて情報保障について考えることができました。また、通訳をするなかで同志社についてより深く知ることができました。卒業後は通訳をする機会はないかもしれませんが、今回の活動を通じて得た学びは今後も忘れずにたいです。

【手話指導補助】

榎本 裕介（生命医科学部医工学科 1年次生）

幼少期から手話を使ってきた私は、その強みを活かしたいと思い、手話通訳の練習に参加しました。練習では、特に聖書の内容を変えずに、より分かりやすい手話表現にすることを目指し、ろう者や手話ユーザーの来場者および視聴者の方にしっかり伝わるよう、チームでどのような手話が適切かを議論しました。同じろう者として、伝え方を工夫する力が身についたと実感しています。

【PC通訳スタッフの声】

國領 あい理（理工学部情報システムデザイン学科 4年次生）

この度、同志社150周年記念の式典でPC通訳を務めさせていただき、言葉は聞く・見るだけでなく、伝えることが重要であると、改めて気が付きました。また、正確性がより重視される環境下でPC通訳を行う中、日英翻訳の言葉選びに迷い、通訳速度が滞ってしまう等反省点もありましたが、今回の日英同時情報保障の経験を活かし、今後は読む側の視点にも立ち、まずは内容を確実に伝えることを優先していきたいと思います。

長谷川 竹雪（商学部商学科 2年次生）

私は高校から同志社で学んでおり、今年で創立150周年を迎えるということで、ぜひ何か携わりたいと思い参加を決めました。

日本語と英語字幕、そして手話での情報保障を通して、同志社のサポート体制が最先端であることを認識すると同時に、これまでの先輩方が積み上げてくださったサポートの経験、知識がここで花開いたように感じました。

次は200周年に向けて先輩方と同じように私たちが学内、学外のサポートで様々な経験を積み、次の世代へとつなげていきたいです。



●2025年度秋学期末全体懇談会

開催日・場所：1月30日（金） 今出川校地 寧静館3階 N36教室
オンラインとのハイブリッド開催

参加者数：45名（利用学生10名、学生スタッフ15名、教職員20名）

各学期の終わりに、利用学生・サポートスタッフ・教職員が一同に介し、学期間のサポートについて振り返る交流の機会を設けています。

2026年1月30日、今出川校地で対面形式の懇談会を開催しました。

当日は、自己紹介とアイスブレイクを通して参加者同士の交流を深めた後、ケーススタディを行いました。サポート中によく見られる事例を台本化した内容をもとに、利用学生とサポートスタッフがそれぞれの立場でどのように行動すべきかについて、グループディスカッションを実施しました。各グループでは活発な意見交換が行われ、多様な視点を共有する有意義な時間となりました。

また、お菓子を囲みながら和やかに交流する時間も設け、普段接する機会の少ない他校地や学年の異なる利用学生・サポートスタッフ同士が交流を深めることができました。

参加者にとって、相互理解を深める大変有意義な懇談会となりました。



参加後のアンケートの一部を紹介します。

【参加者の声】

- ・私は、今回のグループディスカッションをとおして、利用学生とサポートスタッフの距離感をうまく掴めていないということを実感した。それは、利用学生に対してどう接すればよいかわからず、気をつかってしまっているからではないかと思った。支援を受ける学生と支援するスタッフが普通に話している様子を見て、自分もみんなと同じように関わりたいと思った。
- ・4回生の方々からたくさん話を聞いたのが、本当に貴重な体験だった。まずは、堂々と意見を発表する姿、周りへの感謝を忘れずにサポートに励んでいる姿を見て、学ぶところが多かった。活動を始めたばかりのときは一方的な寄り添いになるかもしれないが、活動を重ねる中で、先輩スタッフは、「日々隣の人が過ごしやすいようになるにはどうすればいいか」というに悩んでいたことがわかった。
- ・「頑張れば頑張るだけ悩むことが増えた」「想像をすることの大切さを学んだ」と話すスタッフの言葉が心に強く残り、目の前のことに追われて独りよがりになりがちなの自分の大学生生活にハッとした。『差し伸べた手によって、誰かの生活が少しでも生きやすくなるならこの身を使いたい』と考えるキッカケを与えてくれる懇談会であった。

ケーススタディ

◆テーマ①
利用学生とサポートスタッフの
距離感について



◆テーマ②
サポート中に寝てしまった!



●コンソーシアム事業 シンポジウム『高等教育における障がい学生支援の包括的実態調査と「学びのユニバーサルデザイン」構築に向けたコンソーシアム型支援モデルの提案』

開催日・場所：3月7日（土） 今出川校地 良心館 305 教室

協カスタッフ：10 名（学生スタッフ 8 名、職員 2 名）

2026 年 3 月 7 日に同志社大学今出川キャンパスで 2025 年度大学コンソーシアム京都共同研究調査事業『高等教育における障害学生支援の包括的実態調査と「学びのユニバーサルデザイン」構築に向けたコンソーシアム型支援モデルの提案』シンポジウムが開催され、障害のある生徒・学生の高大移行における現状と課題について筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局准教授の船越高樹氏よりご講演いただきました。

障がいのある生徒・学生の学校から学校、そして学校から社会への移行支援については、現場担当者の裁量や慣例に委ねられている部分も多く、結果として支援が分断されがちであるという課題が指摘されています。移行支援は、中学校から高校へ、高校から大学へ、そして大学から社会へと、さらにその前提にある未就学児の幼保、小、中も含め、教育と社会の各段階を「点」ではなく「線」として縦につないでいく視点が不可欠です。

本シンポジウムは、学校種や立場を越えて関係者が集まり、情報を共有し、対話を行う場として開催されました。



(自作の補助スイッチでハンディファンを操作する実演)

シンポジウム後、PC 通訳を担当した SDA 室のコーディネーターであり
京都市要約筆記者でもある浅倉亜耶さんと鈴木加奈さんにインタビューをしました。

○普段は SDA 室のコーディネーターという立場ですが、今回は学生スタッフと一緒に支援者という立場で PC 通訳を担当されてどうでしたか？

浅倉：学外で要約筆記者としての経験を積んできた私にとって、今回の活動においてサポートスタッフと「同じ情報保障者」として挑戦できるこの機会は、大きな学びと成長につながるものでした。当日まで、SDA 室の鈴木コーディネーターとお昼休みの時間に通訳練習を重ねて、『必要な情報を、必要な人へ、必要な形で届ける！』ことに集中しました。

○お昼休みの時間に練習されていたのですか。ありがとうございます。今回は事業報告・基調講演・パネルディスカッションと動きのあるシンポジウムでしたが、浅倉さんと鈴木さんの間で何か対策などされましたか？

鈴木：当日は、司会パート、講義パート、パネルディスカッション、挨拶と、スピーディに対応しなければならないので、対応策として、前ロール（原稿）担当、メインの入力担当、話者名や数字の入力補助担当、訂正担当と役割分担をして臨みました。

○シンポジウムでは 4 名の方が PC 通訳を担当されていましたが、それぞれに役割があったのですね。本番ではどうでしたか？

鈴木：本番では、話者のスピードの速さ、次々と切り替わるディスカッション、予測不能な流れなど、クリアしなければならない壁がいくつもありました。それでも、『人の手で届ける通訳』だからこそ実現できる話者の切り替えや臨場感等、その場に全員が等しく参加できるような情報保障を届けることを心がけました。PC 通訳の画面上では 4 名のスタッフ間で絶えず連携をとっていたんです。

○『人の手で届ける通訳』だから実現できることについて、もう少し詳しく教えてください。

浅倉：最近では音声認識アプリが進化していますが、話者の識別はまだ難しいのが現状です。例えばオンライン上で話されている方以外（画面外）の方が話した声は、映った人の言葉として字幕表示されます。聞こえている人にとっての字幕と聞くことに困り感のある人にとっての字幕は、それぞれ得ている情報はイコールではないと捉えています。

○人の手による文字情報と音声認識アプリによる文字情報は、それぞれにメリット / デメリットがあるということですね。最後に一言ずつお願いします。

鈴木：普段の授業の中で、先生から「これは打たなくていいよ」と言われたことが、後に授業に関連したが省いてしまった、という報告を何度か聞きました。様々な種類の情報を等しく提供できることが合理的配慮の基本と考えて、今後も授業や行事の通訳に取り組んでいきたいと思っています。

浅倉：同志社大学創立者である新島襄先生の、「諸君ヨ、一人一人ハ大切ナリ」という理念を胸に「誰一人取り残さない情報保障」を目指して、発信者が届けたい情報と受け手が必要とする情報をしっかりコーディネートできる PC 通訳者として尽力したいと思っています。

社会貢献事業

●関西万博2025

開催日・場所：10月4日（土） 関西万博 2025 ヘルスケアパビリオン前リボーンステージ
協力スタッフ：10名（学生スタッフ5名、職員5名）

10月4日にEXPO2025大阪・関西万博のヘルスケアパビリオン前リボーンステージで開催された「Hello！おもてなしジュニア」イベントにおいて、情報保障者としてSDA室のサポートスタッフが参加しました。SDA室では、プレステージ企画「Hello！おもてなし アクセシビリティプロジェクトー世界とつながるための挑戦ー」にて、来場者の皆さまへ「アクセシビリティ」の重要性を紹介した後、イベント全体の情報保障として、手話通訳と日本語・英語の同時PC通訳を担当しました。

当日は雨天で、屋外での電波状況の不安定さや音声不達等の難易度の高い通訳ではありましたが、学生が日々積み重ねてきたサポート活動の経験と協力体制、そして同志社大学のキャラクター「Ben-k」の登場もあり、無事イベントを終了することができました。

万博という場で、二度とない素晴らしい経験をしたスタッフの声を紹介します。



【手話通訳スタッフの声】

谷口 菜津穂（社会学部教育文化学科 4年次生）

今回活動させていただいたきっかけは、SDA室のコーディネーターから当活動についてご連絡をいただき、万博という、様々な人が訪れる大きな舞台で手話通訳をさせていただける機会は貴重だと感じ、活動に応募しました。活動では、当日まで状況がわからない部分も多く、不安な場面もありましたが、なんとか対応でき、安心しました。

手話通訳を今回担当させていただき、その場に合った臨機応変な対応や見やすさを意識した表現など、自身の力を伸ばすことができました。

非常に嬉しかったのは、チアダンスの子が、手話通訳を見て、「手話に興味を持ちました！勉強してみます！」と声をかけに来てくれたことです。手話通訳を行うことで、単に情報保障だけでなく、誰かが手話に興味を持つきっかけを作ることにもつながるのだと実感しました。私の通訳が未来を担う子どもたちの興味を引き出したことに大きなやりがいを感じました。

【PC通訳スタッフの声】

宗重 咲南（心理学部心理学科 3年次生）

私はSDA室でのサポートスタッフ歴は長くはないですが、昔からタイピングが大好きで、初めてPC通訳をしたときに、「自分が大好きなことで、誰かの助けになれるんだ」と、とても嬉しくなったのを覚えています。人生で一度しかないかもしれない日本での万博開催において、PC通訳スタッフとして実践の機会を得られることは、かけがえのない経験になると思い、応募しました。

万博での活動を通して、自分自身にとっても良い経験になりましたが、それだけではなく、私たちがPC通訳している様子を、後ろを通る来場客の方々や、イベントを見に来た方々、同じイベントに参加した方々が見て下さる場面がありました。このことを通して、全ての人が等しく情報にアクセスできるようにする「情報保障」について、一人でも多くの方に知っていただけたのではないかと感じています。これからも、学内での学生支援はもちろん、学外でも積極的に活動し、情報保障の重要性を社会に広めていきたいです。

●第33回パラアーティストックスイミングフェスティバル

開催日・場所：10月5日（日） 京都市障害者スポーツセンター

内 容：PC通訳

協力スタッフ：4名

2025年10月5日、障がいのある人となない人がともにアーティストックスイミングに取り組み、お互いの交流や技術の向上を目指すフェスティバルが京都市障害者スポーツセンターで開催され、4名のサポートスタッフがPC通訳をしました。

PC通訳として参加した学生の声を紹介します。



【PC通訳スタッフの声】

・今回、サポートスタッフに登録し二度目となるPC通訳のサポートでした。自身の経験が浅く、大学外の活動であることから終始緊張してばかりでした。しかし、先輩スタッフによるフォローもあり、無事に情報保障者としての役割を全うすることができました。また、休憩時間や前後の時間にはフェスティバル関係者の方々からも様々なお気遣い、お言葉をいただくことがあり、今回、微力ながらもサポートに応募して良かったと深く感じました。

出演された方それぞれがこの大会に向け挑戦し、研鑽を重ねてきたということが皆さんのパフォーマンスから強く感じられ、強く感銘を受けました。

自分自身の「経験の浅さや得手、不得手に臆することなく挑戦を重ねたい」そんな意志を改めて抱くに至るような、非常に貴重な体験をさせていただきました。

・先輩方の素早いタイピング、対応の仕方を間近で見ていただく良い機会でした。初めてのPC通訳活動でしたが色々フォローしていただき、サポートスタッフの皆さんの視野の広さ、心の温かさを実感しました。年齢はさほど変わらないものの、その姿勢に刺激を受け、私の目標になりました。

開会式では、パラ競技の父、ルードヴィッヒ・グッドマンの言葉が紹介されました。「失われたものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ」その言葉を体現するかのよう、懸命に演技をする選手の皆さんの姿に、心から感動し、私も選手の皆さんのように諦めず前を向いて生きたいと強く感じました。普段ではなかなか得ることができない、感動と学びの機会になりました。

SOGIに関する取り組みについて

●同志社レインボー映画祭

『彼女が好きなものは』

開催日・場所：6月16日（月）今出川校地 寒梅館ハーディーホール
6月19日（木）京田辺校地 夢告館102

『キャロル』

開催日・場所：6月30日（月）今出川校地 寒梅館ハーディーホール
6月26日（木）京田辺校地 夢告館102

内 容：映画鑑賞

参加者数：延べ69名（教職員含む）

（感想シェアティーパーティー）

開催日時：6月16日（月）、6月19日（木）、6月26日（木）各日、上映後に実施

参加者数：延べ17名

（キャロルトークショー）

開催日：6月30日（月）今出川のみ

参加者数：29名



【参加学生の声】

- ・他の人の考え方を聞き、自分の考えを話すことで自分の考えを整理できた。
- ・多様性について議論できて、理解を深めることができた。
- ・立場の違う国の異なる人々の意見を聞くことができました。ありがとうございました。

●教職員対象 LGBTQ+の学生への配慮・対応に関する研修会

開催日：2025年12月5日（金）オンライン開催

参加者数：30名

教職員を対象とした「LGBTQ+の学生への配慮・対応に関する研修会」を実施しました。講師として一橋大学の柘植道子准教授をお招きし、LGBTQIA+の基礎と学生の理解と対応についてご講演いただきました。LGBTQIA+の定義の詳細や社会でマイノリティが抱える生きづらさを構造面・制度面などの理論もご紹介いただきながらお話をいただきました。多様性の国際動向から学内・授業内での対応まで、幅広く貴重なお話をお聞きすることができました。

●性の多様性に関する調査

対象：全学部・研究科学生

今年度は自由記述の意見収集に特化し、11月14日より2か月間、同志社大学ポータルを利用して実施しました。今後の性的マイノリティ当事者の支援、また学生への多様性への理解啓発イベントの参考にしていく予定です。

●LGBTQ+パネル展

開催期間：6月23日（月）～6月27日（金）

場 所：今出川校地 ラーニングcommons プレゼンテーションコート
京田辺校地 ローム記念館劇場空間

内 容：ジェンダー・人権・社会問題を考える活動をしている学生支援センター登録団体の Gender Garden と協力し、SOGI や LGBTQ+ の理解を深めるためのパネル展を実施しました。LGBTQ+ の基礎知識に加え、学生ならではの視点でお勧め書籍や音楽、男性学の視点などについて紹介しました。両校地とも、学生が自由に見て回ることができ、また、様々な意見をボード上で共有することで、多様な価値観について知り考える機会となりました。

〈パネル一部抜粋〉

June 2025
PRIDE MONTH
LGBTQ+ パネル展

6月は「プライド月間（Pride Month）」
世界各地でLGBTQ+の理解を深め、権利を啓発する活動・イベントが実施されます。
「プライド」とは、人の持っている「誇り」。
「LGBTプライド月間」はLGBTQ+であることを恥じることなく誇りをもって堂々と生きようという気持ちが込められています。

【展示期間】
06.23 (MON) ~ 06.27 (FRI)

【主催】同志社大学 学生支援センター
スチューデントダイバーシティ・アソシエーション (SDA)

【協力】同志社大学 学生支援センター登録団体「Gender Garden」

同志社大学ダイバーシティ推進宣言

同志社大学は、「一層の多様性を尊重し、多様な人々の成長を促すこと」を目的として、本学の教育・研究活動を通じて、多様な人々の成長を促すことに取り組んでいます。本学は、多様な人々の成長を促すことに取り組んでいます。本学は、多様な人々の成長を促すことに取り組んでいます。

性4要素

性別、性自認、性的指向、性的表現

SOGIについて

SOGIとは、Sexual Orientation and Gender Identityの略称で、性的指向と性自認を指します。SOGIとは、Sexual Orientation (性的指向) と Gender Identity (性自認) の2つの要素から構成されています。性的指向とは、自分が好きな人（パートナー）を好きになる傾向のことです。性自認とは、自分が女性か男性か、あるいはそれ以外の性別をどう感じるか、という自己認識のことです。

LGBTQ+とは？

LGBTQ+は、Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender, Queer and Questioningの略称です。それぞれの略称の意味は、Lesbian（レズビアン）、Gay（ゲイ）、Bisexual（バイセクシュアル）、Transgender（トランスジェンダー）、Queer（クエア）、Questioning（クエスチョニング）です。

関連用語「ALLY」

英語で仲間や協力者、支援者、同盟を意味します。LGBTQ+の人たちやその家族を支援し、偏見や差別に立ち向かうことを指します。

私たちにできる大切なこと

- 性別に左右されない敬称を使用しましょう。
- 差別的な言動や嘲笑、女装の強要は、SOGIハラです。SOGIハラをしないだけでなく、SOGIハラの場合に直面したらその場で注意を！
- 本人の許可なくSOGIを暴露（アウティング）をしたり、SOGIに関するうわさ話をしたりしないように！

※アウティングは、当事者との信頼関係を壊し、本人の居場所を奪い、最悪の場合、生命にかかわる事例につながる可能性があります。

- LGBTQ+当事者が、その場にいることを前提に話をしましょう。
- 見た目で、その人のジェンダー、セクシュアリティを判断しないように！
- 同性愛者やトランスジェンダーの人々に差別的な仕草や言動をしないようにしましょう。
- ジェンダーバイアス（男女はこうあるべきという偏見）をなくしましょう。
- 恋愛の対象は異性だけでなく決めつけないようにしましょう。恋愛感情がない人もいます。

SDA室では多様な性について相談を受け付けています

- 性的指向（好きになる性）、性自認（自分で認識している性）に起因する悩み・学生生活上の困りごと、不自由、不安や心配事
例）ゼミ合宿の部屋割りについてどこに相談すればいいかわからない
- 自身の性的指向・性自認そのものに関する不安や悩み
例）もしかして、私、他の人と何が違うのかも・・・
- その他
例）友人からカミングアウトされたが、どうしたらいいかわからない

SOGIに関する ←相談予約フォーム

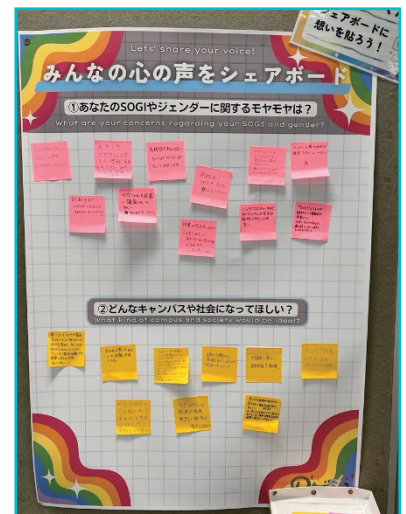
同志社大学学生支援センター-SDA室

今出川校地 寒梅館1階・明徳館4階
京田辺校地 成心館1階

SOGIに関する専用ダイヤル **0774-65-7413**

相談を希望される場合は、できるだけ相談予約フォームで事前予約をしてください。相談される際、皆さんのプライバシーは厳重に守られます。安心して相談してください。

〈当日の様子〉



スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援センターについて

● 2025 年度サポートスタッフ登録・活動の状況

登録状況

(単位：人)

2025 年度	スタッフ	学生	一般	合計
春学期 (7 月末集計)	登録者数	146	11	157
	活動者数	80	4	84
秋学期 (1 月末集計)	登録者数	150	13	163
	活動者数	49	3	52

週当たりの派遣コマ数 (2025 年度 春学期) (単位：コマ)

活動内容	両校地
PC 通訳 (1 コマ 3 名体制含む)	19
ノートテイク	9
講義補助	16
移動介助 (車いす介助)	7
代筆	28
生活支援	1
食事介助	1
座席確保	0
付き添い	1
合計	82

授業を除く派遣数 (活動がある場合の週当たり) (単位：人)

活動内容	両校地
代理タイピング	7
文字起こし	12
字幕付け	0

週当たりの派遣コマ数 (2025 年度 秋学期) (単位：コマ)

活動内容	両校地
PC 通訳 (1 コマ 3 名体制含む)	5
ノートテイク	3
講義補助	14
移動介助 (車いす介助)	4
代筆	21
生活支援	1
食事介助	1
座席確保	2
付き添い	0
合計	51

授業を除く派遣数 (活動がある場合の週当たり) (単位：人)

活動内容	両校地
代理タイピング	8
文字起こし	0
字幕付け	1

1. 本学における障がい学生支援のあゆみ

同志社大学の障がい者支援は 1949 年に遡る。入学試験において、日本の大学で初めて点字受験の対応を開始した。1975 年、点訳・墨訳担当者を配置し、試験問題の点訳を開始。1982 年には学長の諮問機関として「障害者問題委員会」を設置し、これを契機に今出川校地内建物入口スロープや自動昇降機を設置、1984 年からは語学テキストの点訳業務を開始した。

1986 年、京田辺校地の開校にあたり、キャンパスの基本設計から全面的なバリアフリー化をはかり、図書館内には点字室や対面朗読室を設けた。

2000 年 3 月、「障害者問題委員会」からの学長宛て答申を契機として同年 5 月「障がい学生支援制度」がスタートし、翌 2001 年に同委員会からの再答申により、講義補助から講義保障へと一段と踏み込んだサポートが開始された。この際、一部の支援で、サポートスタッフの活動を有償化した。

2002 年には「障害者問題委員会」を「ノーマライゼーション委員会」と名称変更し、学内の障がい学生の総合的相談窓口を、学生部に一本化、2004 年、今出川・京田辺の両キャンパスに常勤の障がい学生支援コーディネーターを配置し、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-Japan) との連携協力を開始した。

2006 年には日本学生支援機構 (JASSO) の「障がい学生就学支援ネットワーク事業」の拠点校として連携協力を開始し、2007 年にはアシスタントスタッフ (有償) とボランティアスタッフ (無償) を統一し、「サポートスタッフ」として全支援を有償化した。

2008 年、「ノーマライゼーション委員会」を発展解消し、「学

生主任連絡会議」に整備・再編するとともに、学生支援センター内に「障がい学生支援室」を設置した。

2009 年秋より、事務組織上、障がい学生支援室を京田辺校地学生支援課に一元化した。

2014 年秋に発足した全国高等教育障害学生支援協議会 (AHEAD JAPAN) に発起人校として参加した。

2016 年 4 月の「障害を理由とする差別解消の推進に関する法律 (障害者差別解消法)」施行に伴い、2018 年 4 月に障がい学生支援制度の一部見直しを行い、修学支援に関する申請から合理的配慮の決定手続きまでの過程を明確化するとともに、支援内容については学生とその所属学部 (大学) が合意をとる形式とした。

2021 年 4 月、障がい学生支援室が改組され、スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室 (SDA 室) が開設された。

2. スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援センター

2026 年 4 月、改組によりスチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援センター (SDA センター) として独立した。現在、SDA センターには専属の障がい学生支援コーディネーターが常駐しており、障がいのある学生に対して学生サポートスタッフの協力を得て、授業保障に関わるサポートを行っている (授業保障とは、障がいのある学生が希望するすべての授業について、一般学生と同じレベルで受講できるよう保障することである)。

同志社大学における障がい学生支援の沿革

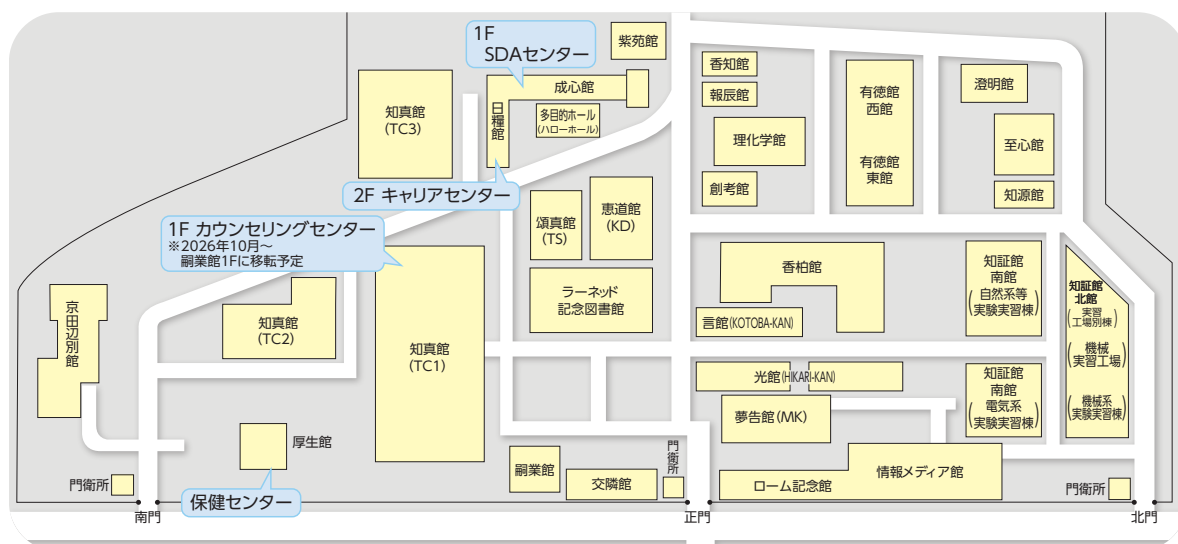
1937 年	ヘレン・ケラー女史、同志社女子部で講演
1949 年	大学入学試験において点字受験対応を開始（日本の大学では初）
1952 年	同志社大学盲学生友の会（盲友会）結成、盲友会による授業支援開始
1975 年	教務課に非常勤の点訳・墨訳担当者を配置 試験問題の点訳を開始、1984 年度より語学テキストの点訳業務開始
1982 年	大学長の諮問機関として「障害者問題委員会」設置（1982 年 4 月）を契機に、以後順次今出川校地内の建物入口スロープや自動昇降機等を設置
1986 年 4 月	京田辺校地設計にあたりバリアフリー化を企図、図書館内に点字室と対面朗読室を開設
1991 年	視覚障がい者用ワープロ購入と同時に図書館（今出川校地）内に点字室を設置
1992 年 4 月	教務課（今出川校地）に常勤の点訳・墨訳担当者を配置
2000 年 5 月	障害者問題委員会からの学長宛答申（2000 年 3 月）を契機として「障がい学生支援制度」がスタート（予算管理は教務課） ・ 障がい学生の把握と相談窓口 ・ 正課授業保障の体系化（教科書点訳は基本的に大学が責任をもつ） ・ 障がい学生の人的支援制度 (1) 「障がい学生支援連絡会」を設置 (2) 学生課（京田辺校地）によるボランティア（ノートテイク・パソコン通訳）学生派遣 (3) 奨励金制度の導入・懇談会の開催
2001 年 10 月	障害者問題委員会からの学長宛答申（2001 年 8 月）を契機として「講義補助」から「講義保障」へ制度の謳いなおし ・ 講義保障のために、ボランティアスタッフ（主に視覚障がい学生及び肢体不自由学生へ学生生活支援（無償））に加え、アシスタントスタッフ（聴覚障がい学生への講義通訳（有償））制度を導入
2002 年	予算管理を学生課（京田辺校地）へ移管 「障害者問題委員会」を「ノーマライゼーション委員会」と名称変更
2002 年 1 月	学生課（京田辺校地）に常勤の手話通訳担当者を配置
2003 年	「障害」の「害」について、人を意味するときのみ「障がい」とする旨を決定、採用 大学院生に対しては可能な範囲で補助をする「講義補助」という立場を明確化
2003 年 4 月	入学式・卒業式に手話通訳を導入
2004 年 4 月	両校地に常勤の障がい学生支援コーディネーターを配置 肢体不自由者（電動車イス専用）用トイレ設置
2004 年 5 月	学生部再編により学生支援センターへ名称変更
2004 年 10 月	日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）への連携協力開始
2005 年 3 月	両校地の全ての教室棟扉・トイレに点字シールと対応墨字シール貼付
2005 年 5 月	JR 福知山線脱線事故で受傷した学生に対して「障がい学生特別支援体制」で対応
2005 年 8 月	Challenged キャンプ開始
2005 年 9 月	学際科目（現・複合領域科目）「学びのバリアフリーを考える－障がい学生支援－（聴覚障害への講義保障を通して）」の運営協力を開始
2006 年 10 月	日本学生支援機構（JASSO）の「障害学生修学支援ネットワーク事業」に拠点校として連携協力開始
2007 年 4 月	ボランティアスタッフ（無償）とアシスタントスタッフ（有償）を統一し、「サポートスタッフ」として全支援有償化
2007 年 10 月	障がい学生キャリア支援セミナーをキャリアセンターと協力して開催
2008 年 4 月	「ノーマライゼーション委員会」を発展解消し、「学生主任連絡会議」に整備・再編 障がい学生支援窓口を「障がい学生支援室」として再編
2008 年 10 月	第 4 回 PEPNet-Japan シンポジウム「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2008」において Challenged キャンプの発表で PEPNet-Japan 賞を受賞
2009 年 4 月	学生支援機構を設置し、4 つのセンター（学生支援・保健・カウンセリング・キャリア）が連携し、組織的かつ総合的な学生支援体制を構築

2009 年 11 月	「障がい学生支援室」を学生支援センター京田辺校地学生支援課に一元化
2010 年 11 月	第 6 回 PEPNet-Japan シンポジウム「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2010」において「心のバリアフリーをめざして」および「Challenged キャンプ」の発表で準 PEPNet-Japan 賞を受賞
2011 年 4 月	日本学生支援機構（JASSO）「平成 22（2010）年度障害学生の教育支援に関する調査研究委託事業」『理工系大学院における聴覚障害学生の支援について』調査報告書発行
2011 年 5 月	PEPNet-Japan 連携協力校として東日本大震災により被災した大学への遠隔情報保障支援を開始
2011 年 9 月	障害学生修学支援ブロック別地域連携シンポジウムを日本学生支援機構と共催
2011 年 10 月	PEPNet-Japan 「障害学生支援大学長連絡会議」に開催校として協力
2012 年 12 月	第 8 回 PEPNet-Japan シンポジウム「聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2012」において「同志社の実り～そだてる・つながる・ひろがる～」の発表で 2 度目の PEPNet-Japan 賞を受賞
2013 年 2 月	同志社大学障がい学生支援に関する指針（ガイドライン）制定
2013 年 4 月	学生支援センター障がい学生支援室を大学事務機構規程に明記
2013 年 6 月	障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）制定
2013 年 12 月	PEPNet-Japan が「平成 25 年度バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰」において「内閣総理大臣表彰」を受賞
2014 年 4 月	今出川・京田辺両校地フリーアクセスマップ製作
2014 年 10 月	一般社団法人全国高等教育障害学生支援協議会（AHEAD JAPAN）発足 [発起校として参加]
2014 年 12 月	2015 年度から「人」を意味するときに加え「人の状態」を表す場合も「障がい」と表記を統一することを決定
2015 年 2 月	同志社大学障がい学生支援に関する指針（ガイドライン）改正
2015 年 6 月	PEPNet-Japan 遠隔情報保障事業モデル校採択
2015 年 11 月	大学生協同組合におけるインターンシッププログラムを実施
2015 年 12 月	同志社大学障がい学生支援室内規制定
2016 年 4 月	障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）施行
2016 年 6 月	PEPNet-Japan 特別プロジェクトとして熊本地震により被災した大学への遠隔情報保障支援を開始
2017 年 1 月	同志社大学障がい学生支援調整委員会に関する申合せ制定
2017 年 11 月	同志社大学障がい学生支援に関する指針（ガイドライン）改正
2018 年 4 月	障がい学生支援制度を一部変更し、合意内容確認書等を導入
2020 年 5 月	障がい学生支援制度発足 20 周年
2020 年 11 月	第 16 回 PEPNet-Japan シンポジウム「聴覚障害学生支援実践事例コンテスト 2020 特別編」でサポートスタッフが「最優秀作品賞」を受賞
2021 年 2 月	スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室内規制定
2021 年 3 月	ハリス理化学館同志社ギャラリー第 22 回同志社ギャラリー企画展 『「支え合う志」をつないで－障がい学生支援制度発足 20 周年－』（2021 年 3 月 19 日～5 月 23 日）
2021 年 4 月	改組により「スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室」設置
2021 年 6 月	障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律の一部改正・公布
2021 年 8 月	障がい学生支援制度発足 20 周年記念シンポジウムを開催
2022 年 8 月	3 年振りに Challenged キャンプを宿泊型・対面形式で催行
2023 年 12 月	第 19 回 PEPNet-Japan シンポジウム「聴覚障害学生支援に関する川柳コンテスト 2023 教職員部門」でコーディネーターが「最優秀作品賞」を受賞
2024 年 4 月	障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律の改正により合理的配慮の提供が義務化
2024 年 4 月	同志社大学障がい学生支援に関する指針（ガイドライン）改正
2024 年 12 月	今出川・京田辺両校地バリアフリー詳細マップを製作
2026 年 1 月	同志社大学スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援センター規程制定
2026 年 4 月	改組により「スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援センター」設置

今出川校地



京田辺校地



同志社大学

スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援センター (SDAセンター)

今出川校地 寒梅館1階

〒602-0023 京都市上京区烏丸通上立売下ル御所八幡町103
Tel: 075-251-3273

今出川校地 明德館1階

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入
Tel: 075-251-3261
E-mail: ji-sda@mail.doshisha.ac.jp

京田辺校地 成心館1階

〒610-0394 京田辺市多々羅都谷1-3
Tel: 0774-65-7411

*2026年4月よりSDA室からSDAセンターへ改組しました。

本パンフレットはユニバーサルデザイン(UD)フォントを使用しております。

ユニバーサルデザイン(UD)フォントとは、より多くの人へ適切に伝えられるよう、ユニバーサルデザインの視点から見やすさ、読みやすさを配慮・確認し、制作されたフォントです。



2026年7月発行